

外国につながる 子どもの教育



若林 秀樹

「外国につながる子ども」という言葉を知っていますか。外国人の子でも日本国籍を持っていたり、日本で生まれ育ったりと背景は多様です。そこで、教育分野では近年、外国にルーツを持つ子どもの総称としてこの呼び方が定着しています。

この春、外国人材受け入れ拡大に関するニュースがテレビや新聞をにぎわ

山積する課題

せました。外国人労働者が増えることで、外国につながる子どもの増加も見込まれますが、その教育をめぐる課題は山積しているのが実情です。

課題の一つに、日本語指導の難しさがあります。日本語が分からないといってもその線引きは容易ではなく、幅広い支援が要求されます。日常会話ができるも、授業を理解するにはさらに

ひとごとにせず考える

難しい日本語を覚える必要があるからです。

小学校で来日し2〜3年たち日常生活に不自由がなくなった子どもは周囲から「もう大丈夫」と思われがちですが、中学校に進むと状況が一変します。学習用語が難しく授業についていけず、定期テストの点数は一桁、自信もやる気もなくしてしまいます。

教科担任制の中学校では、教員と生徒の接点は授業しかないのです、点数が低ければ厳しい評価も避けられませんが、やがて取り返しのつかないほど学習が遅れ、高校進学を諦めてしまいます。

このような子どもには、いつどのような指導をすべきだったのでしょうか。学校や社会はどう関わっていけば良かったのでしょうか。少なくとも、思っようなキャリア形成ができないことを本人や保護者だけのせいにするのは間違いです。

外国人が増える日本で、外国につながる子どもの教育を考えることは、10年後の社会を考えることに直結します。この連載では、子どもとその保護者、教員たちを取り巻く課題を、実体験を交えて伝えます。山積する課題を「誰かが解決すればいい」というひとごとでなく、皆さんが身近に感じてもらいたいきっかけになればと願っています。

(宇都宮大客員准教授)



わかばやし・ひでき 栃木県の公立中学の英語教諭として勤務後、1998年から12年間日本語教室担当教員を経験。現在は宇都宮大国際学部客員准教授として、経験を踏まえた情報発信や多言語翻訳技術の教育活用研究に注力している。

北日本新聞（富山）2019.7.7（日）



画・原澤美紀